イエスと弟子トマス
Jesus and Thomas the Apostle

第１１回　風に揺らぐ葦

text: 宝彩有菜

「トマスの福音書」は、１９４５年に、エジプトのナイル川河畔の洞窟に１８５０年以上も埋もれていた壺の中から奇跡的に発見されました。これは、イエスの言葉だけを記載してあるもので、「言葉福音書」と呼ばれています。全部で１１４項目ありますが、そのほとんどが例え話です。一読して何を言いたいのか、良くわからないものが多いのですが、「それらは、イエスが瞑想や悟りのことを伝えるために、例えを使って話したもの」と仮定して、では、一体それが具体的に何の例え話であるのかを解説しています。今回は、その第１１回目です。なお、各センテンスの訳文は、上段、中段、下段の順に
（１）Thomas O. Lambdin　による英訳
（２）Stephen Patterson and Marvin Meyer　による英訳
（３）「トマスによる福音書」（荒井献著・講談社学術文庫）による和訳
の順に記載しています。

---

(68)Jesus said, "Blessed are you when you are hated and persecuted. Wherever you have been persecuted they will find no place."
(68)Jesus said, "Congratulations to you when you are hated and persecuted; and no place will be found, wherever you have been persecuted."
(68) イエスが言った、「あなたがたが憎まれ、迫害されるならば、あなたがたは幸いである。そしてあなたがたが迫害された場は見出されないであろう」

「迫害されるなら、幸いである」と、このような逆説的な言明は、イエスの他の共観福音書にも、同様の言い回しが載っていますし、トマスの福音書にも、これまでに、第５４項と、第５８項で、次のようなセンテンスとして出てきています。

---

(54) Jesus said, "Blessed are the poor, for yours is the kingdom of heaven."
(54) Jesus said, "Congratulations to the poor, for to you belongs Heaven's kingdom."
(54) イエスが言った、「あなたがた貧しい人たちは、幸いである。天国はあなたがたのものだから」だ。

---

(58) Jesus said, "Blessed is the man who has suffered and found life."
(58) Jesus said, "Congratulations to the person who has toiled and has found life."

(58) イエスが言った、「苦しんだ者は、幸いである。彼は命を見出した」

いずれも、ポイントは同じで、あることに苦しんでいることに気が付けば、その苦しさを解消する手立てが打てる。そして、解消する手立てを打てば、それは解消できて、結果として、苦しみはなくなるということです。
イエスはたぶん、単純にそう言ったと思いますが、福音書の編者は、それを強調するためにそれぞれ、修飾的な言葉を追加しています。
「あなたがた貧しい人たちは、幸いである」。どんなに幸いかと言えば、まるで、「天国はあなたがたのものと言えるくらい」と続けたわけです。
「苦しんだ者は、幸いである」。どれくらい幸いかと言えば、「彼は命を見出したくらい幸せになる」と続けたわけです。
「あなたがたが憎まれ、迫害されるならば、あなたがたは幸いである」。どれくらい幸いであるかと言えば、「それは、まるで、あなたがたが迫害された場所は、どこにもなかったと思うくらいであろう」と続けたわけです。

つまり、苦しかったことを解消できれば、それは考えられる最高の幸せに到達できると強調しているわけです。心の仕組みから言えば、同じ天秤の一番端から、逆の一番端に振れることになると言っているわけです。
ですから、「苦しいと気が付けば、それはラッキーである」ということです。ここでは、飢えや、貧乏などの苦痛ではなくて、迫害の苦痛をテーマにしていますが、ポイントは同じことです。

では、なぜ、わざわざここで迫害を別のテーマのように取り上げて、また、再び言明しているのかといえば、多分、迫害ということは、心の苦痛の部分もあるとは思っていない弟子が多かったからでしょう。
当時、ユダヤ民族はローマ帝国の支配下にあり、ユダヤ民族はローマ軍からいわゆる「迫害」をされていた状況ですから、ユダヤ教の各派の中には、その迫害に抵抗したり、反発や反乱を企てようとしていたグループもありました。「迫害」は苦痛であるが、それは、精神的なものではなく、戦うべき民族的、政治的なことであると、多くの人に思われていたのでしょう。
それに対して、イエスは、「迫害された」という思い、その「苦痛の思い」に限っていえば、それも、思い方次第だよ、消そうと思えば消せるよと言ったわけです。

「笑雲先生」
「なんだい、小松茸」
「でも、心の中の強欲で自分が苦しくなっているのであれば、それに気が付いて、それを解消すれば、苦しさも解消できるでしょうが、『迫害』は、実際に、生活が苦しいのですから、イエスが言うように、『それに気が付いて手を打てば解消できる』というものでは、ないのではないですか。迫害は現実に物理的、経済的、強制的なものであって、修行をしても、その苦しさは解消できないのではないですか。笑雲先生」
「それはそうだ。現実の事実は、どうしようもない。修行して変えることができるのは、自分の中の心の問題、思い方だからね。イエスは政治家ではないし、革命家でもない。悟りの先生だ。心の先生だ。だから、『迫害されて苦しい』と言っている人の心の問題を言っているだけだ」
「なるほど。そうですか。外に向かって変えようとするのではないのですね。ですから、次のようなセンテンスが、続いて出てきたのですね」
「どんな、センテンス？」
「『心の中で迫害』されているというセンテンスです」
「そうかもしれないね。では、次に行ってみよう」
「はい」

(69)Jesus said, "Blessed are they who have been persecuted within themselves. It is they who have truly come to know the father. Blessed are the hungry, for the belly of him who desires will be filled."
(69)Jesus said, "Congratulations to those who have been persecuted in their hearts.they are the ones who have truly come to know the Father. Congratulations to those who go hungry, so the stomach of the one in want may be filled."
(69) イエスが言った、「心の中で迫害された人たちは、幸いである。彼らは、父を真実に知った人たちである。飢えている人たちは、幸いである。欲する者の腹は満たされるであろう」

心の中で迫害されている人とは、「私は、迫害されていて、不幸だ」と思っている人のことです。その逆の状況は「私は、丁重なおもてなしを受けて嬉しい」と思っていることでしょうか。つまり、ぞんざいな扱いを受けて、不幸だと思っているのも、丁重な扱いを

受けて、嬉しいと思うのも、同じ判断基準の比較の問題です。外見的には同じぞんざいな取扱いであっても、外見的には同じ丁寧な取扱いであっても、本人の思い方次第で、その捉え方は変えられるということです。あくまで、精神論、修行の話をイエスはしているわけです。

迫害での苦しさが、心の問題の部分も大いにあるのであれば、その思い方を変更することによって、「迫害されて不幸だ」という思いを脱却することも、簡単にできますよとイエスは言っているわけです。また、それがどれほど簡単かと言えば、それは、今まで出てきた他の例えと同じように簡単で、やり方は共通だと言っています。
「何かに飢えている」、何かを欲している。だから苦しいと思っているのを解消するには、それと逆の方向に行けばすぐに、心は満たされるということです。
「丁寧に扱って欲しい」と「欲」で苦しくなっていることに、もし、気が付けば、「丁寧に扱ってあげる。おもてなしをしてあげる」と「愛」を出す方向に進めば、その苦しさは簡単に消えます。
「親切にして欲しい」と「欲」で苦しくなっていることに、もし、気が付けば、「親切にしてあげる」と「愛」を出す方向に進めば簡単に解消します。
「自分を愛して欲しい」と「欲」で苦しくなっていることに、もし、気が付けば、「自分から相手を愛してあげる」と「愛」を出す方向に進めば簡単に解消します。
このように、心で思っている不満足で苦しいのは、すぐに解消され、満足や、感謝に変えることができます。

「笑雲先生」
「なんだい、小松茸」
「イエスは、この心の仕組みを、何度も何度も言っていますね」
「そうだね。これはイエスの教えの基本だからね。『欲』で苦しいのは、『愛』に変えればすぐに解消するというものだ」
「でも、このように何度も何度もイエスが言うということは、弟子がなかなか理解しなかったということですか」
「ああ、なるほど。そうかもしれないね。実践が大事だからね。実践しないとこのイエスの逆説的な言い方の本当の意味は分からない。実感できない。従って理解できない。何度も言っているが、なかなか理解してくれないと、だんだん言い方が厳しくなるだろうね」

「そんな感じですね。次のセンテンスは相当厳しいですよ。笑雲先生」
「そうかい、では、次に行ってみよう」

(70)Jesus said, "That which you have will save you if you bring it forth from yourselves. That which you do not have within you will kill you if you do not have it within you."
(70)Jesus said, "If you bring forth what is within you, what you have will save you. If you do not have that within you, what you do not have within you will kill you."
(70) イエスが言った、「あなたがたがあなたがたの中にそれを生み出すならば、あなたがたが持っているものが、あなたがたを救うであろう。あなたがたがあなたがたの中にそれを持たないならば、あなたがたがあなたがたの中に持っていないものが、あなたがたを殺すであろう」

このセンテンスでは、「あなたがたを殺すであろう」などと、過激な言葉を使っています。弟子は、「えっ、殺されては堪らない」と思って、イエスの言うことに、本気で聞き耳を立てたのかもしれません。
イエスは、強欲を捨てて、心を愛で満たしなさいと常々言っています。心に愛が溢れれば、誰でもとても幸せになれますし、誰でも苦しみも消えてしまいます。そのことを強調してこの言葉が言われています。
でも、このままでは何を言っているのか、よくわかりませんね。「それを生み出す」の「それ」という指示代名詞の対象がこのセンテンスには出てきません。「それ」が何か分からないと、このセンテンスは全く分からないわけです。
そこで、この第７０番のセンテンスを、これまでの話の流れを考慮しつつ、分り易く言い直すと、次のようになります。

「あなたがたがあなたがたの中に、愛をたくさん生み出すならば、その愛が、あなたがたを救うであろう。あなたがたを幸せに健康にするであろう。あなたがたがあなたがたの中に愛を創出しないならば、愛があなたがたの中に枯渇していることが、あなたがたを不幸にし、さらには、強欲に乗っ取られてついには、あなたがた自身がその強欲に殺されてしまうであろう」

つまり、「それ」とは「愛」のことだったのですね。「愛の不在」はすなわち「欲」ですから、「愛を持っていないことがあなたがたを殺す」の意味は、「あなたがたの持っている強欲

があなた方を殺す」になります。これでスッキリと意味が通りました。
このように、少々キツイ言い回しですが、イエスは、イエスの言いたい重要なポイントを、しっかりと弟子達に語ったのでしょう。

「笑雲先生」
「なんだい、小松茸」
「このように、キツく言われたら、弟子達は、叱られたと思いますね」
「そうだね。多少叱られたような気分で、しんみりうつむきながら聞いていたのかもしれないね」
「これだけ言われてもまだ、弟子達は真意を汲み取っていなかったのでしょうか」
「さぁ、どうかな。弟子達は、どうすれば、幸福になれるのかという話を、自分達のマインドで聞いているからね。マインドは、では、一体何をすればいいのかと、計算したり、比較したりしながら考える。でも、そのマインドの動きがそもそも『欲』だからね。その『欲』を消滅させなければ、『愛』にはならないのだ」
「そうですね。でも、どうしても『欲』が走ってしまいますよ。笑雲先生」
「それはそうだ。マインドは、片時も休まずに、それまで作り溜めたプログラムを参照して走っている。プログラムとは、自分と自分の命を守ろうと、マインドが自分の経験や体験から学習し、これまでずっと積み上げてきたものだ。それらのプログラムが手元に有る限り思考はその線で走るわけだ。欲が走る。だから、その無自覚で使用しているプログラムを抜去しなければならない。強欲を起こさないようにするには、プログラムを抜去する必要があるわけだ。
そして、イエスが弟子に対してサポートできることとは、そのプログラムの抜去作業の手伝いだ。手助けだ。要らない古い幼稚な思い込みは全部捨てましょうということだ」

「笑雲先生。もし、そのようにプログラムを捨てることができた時に、もう一度それを拾い直すことはないのですか。ああ、やっぱり大切だから持っておこうと」
「なるほど。拾い直したければ、拾い直してもいいが、普通は拾い直すことはないね。稚拙なプログラムをやっとのことで捨てることができたら、それを、また拾い直すことは皆無だ。それは考えられない。というか、無自覚に自動反応していたプログラムが、無自覚では起動しなくなることを、『捨てた』と表現しているわけだから、その捨てたプログラムを再び使用することはあっても、それは、自覚して使用しているわけだ。無自覚ではない。意識してそのようにしているだけだから、表面的にやっていることは、プロ

グラムがあった時と同じかもしれないが、自動反応ではない。表面的に同じ行為をしていても、それは、故意に自覚してやっているということになる。だから、もし、プログラムを持っていた時と同じように反応していたとしても、それは、演技だね。無自覚ではない。正確に言えば、『捨てたプログラムは拾い直すことはない』ではなくて、『無自覚に使用されていたプログラムが一旦自覚されると、もう一度無自覚に戻ることはない』が正しいのだろうね」
「なるほど。すると、まぁ、手短に言えば、拾い直すことはないということですね」
「一言で言えばそうなるな」
「じゃぁ、たくさんのプログラムの柱や梁でできた家を、一旦倒壊させたら、もう再び建て直せないようなものですね」
「ああ、そうだね。それは、うまい例えだね。その壊れた家の材料で、また家を建て直すのは無理だが、新しい材料でなら新しい家を建て直すのは簡単で、楽だね」
「なんだか、そんなことをイエスは次で言っていますよ」
「おや、そうかい、では、次に行ってみよう」
「はい」

---

(71)Jesus said, "I shall destroy this house, and no one will be able to build it [...]."
(71)Jesus said, "I will destroy [this] house, and no one will be able to build it [...]."
(71) イエスが言った、「私はこの家を壊わすであろう。そして、誰もそれを再び建てることができないであろう」

人は、幼い時から体験したり、学習したりして、多くのプログラムを作っていきます。まるで、土台を作って、柱を立てて、梁をのせて、壁を作って、屋根をのせて家を作るようなものです。人間関係のプログラムでできた家、運動関係のプログラムでできた家、お金に関するプログラムでできた家など、たくさんの家が建ってきます。

プログラムの抜去は、その家の、壁を一枚剥したり、柱を一本抜いたりするように、一つずつでも、部分的に抜去することが可能ですが、時には、まとめてごっそり抜去されることもあります。特に、人間関係のプログラム群は、それだけで一軒の家が建っているような大きな群になっています。しかもがっしりと建っており、建築材料は、お互いに密接に組み合わされ、連結し、関連しています。ですから、どれか中心的な柱などが抜去される時には、他の多くの建材も崩れて落ちてしまいます。人間関係のプログラム

群の抜去時は、このように関連したプログラムも一気に崩れ落ちますので、それは、まるで、一軒の家がガラガラと音を立てて砂埃を上げながらまるごと跡形もなく倒壊するようなものです。

その崩れ落ちた材料で再び家を再建するのは、材料も破壊されていますし、ほとんど不可能です。アタマの中のプログラムも一旦、崩れて抜けてしまうと、二度と取り上げることはありません。
プログラムが抜けた時は、「ああ、なんてことだ。私はこんなプログラムを後生大事にずっと持っていたのだ。もう要らない」という感じがします。それと、同時に、「ああ、楽になった。まるで、ずっとまとっていた重い鎧兜を脱ぎ捨てたようなものだった。しかも、サイズの合わない小さい鎧兜を。ああ、なんて清々するのだ。重い荷物を捨てることができて本当によかった」としみじみ思います。

そして、重い鎧兜を脱ぎ捨てたあとは、そのような重いものをずっと大事に思って、決して脱ごうとしなかったマインドに対して、「よくも、まぁ、今日まで、こんな苦しい思いをさせてくれたもんだ。まったく、一言くらい、謝罪の弁があってもしかるべきだろう」と思いますが、マインドは、まったく知らぬ顔です。捨てたプログラムを持ち続けていたことに、何の後ろめたさも謝意も持っていません。
「マインドさん、今回、あんなに潔く捨てられたのに、どうして、あんな苦しいプログラムをずっとずっと持ち続けていたの？」と聞いても「要らなくなったから捨てただけです」と平気の平左でシャーシャーと答えます。持ち続けていて、ずっと主人を苦しめていたことへの反省の気配は微塵もありません。本当にあきれた奴ですが仕方ありません。マインドは、「要ると思うから持つ。要らないとなれば捨てる」と、とても合理的に機械的に単純に動いているだけです。

「笑雲先生」
「なんだい、小松茸」
「欲の元の柱や壁を全部捨てて、欲を、もともと起こさない状態を作るのですね」
「それが、幸福の元だ。欲を満たす方向で幸福になろうとするのでは、本当の幸福にはなれない。キリの無い欲望に必ずやられる。必ず不満になり必ず不幸になる。欲を満たす方向では、決して幸福になれないのだ」
「欲を満たす方向では、決して幸福になれない。なるほど。なんだかそのようなことを、

イエスが次で言っていますよ」
「そうかい。では、次に」

……

(72)A man said to him, "Tell my brothers to divide my father's possessions with me." He said to him, "O man, who has made me a divider?" He turned to his disciples and said to them, "I am not a divider, am I?"
(72)A [person said] to him, "Tell my brothers to divide my father's possessions with me." He said to the person, "Mister, who made me a divider?" He turned to his disciples and said to them, "I'm not a divider, am I?"
(72) ある人が彼に言った、「私の兄弟たちに、私の父の持物を私と分けるようにと言って下さい」。彼がその人に言った、「人よ、誰が私を分配人に仕立てたのか」。彼は弟子たちに向かって、言った、「私は分配人なのか」

……

弟子たちが、イエスに向かって、次のように言いました。
「イエス様。あなたは人を幸福に導く方です。多くの人があなたに会って幸せになっています。ですから、私達も幸福にしてください。私達にも幸せを分けてください。私達にも神様がお持ちの幸福を分け与えてください。私達にも神様の財産を分配してください」
しかし、イエスの答えは、
「ええ、なんですって。私が分配人。とんでもありません。誰が私を、分配人に仕立てたのですか。私は、分配人ではありませんよ。私は、諸君の欲求を叶えるためにここに居るのではありません。諸君の欲求の根っこを引き抜くためにいるんですよ。欲しい欲しいと言っているその強欲を抜き去るために居るんですよ。その強欲さえなければ、不満ももともとないでしょう。苦悩ももともとないでしょう。すると必ず輝くような幸せになれます。だから、強欲を抜き去ることが大切です」と言っています。

つまり、イエスは、私は分配人ではない。私は、欲を満たして満足しようと思っている人にその方法を教えている人ではないと言っているわけです。
「欲」をどんどん増強させて「強欲」にして、それで苦しくなっている人を、確かに、イエスは、救うことはできます。でも、その方法は、強欲を満足させるやりかたではなく、その強欲を元から取り去る方法でです。強欲を満足させる方法では、幸せになるのは、到底無理だからです。

だから、イエスは、「ええ、なんですって。私に、天国の幸せを分けてくれって言ってるの？　とんでもない。私は、幸福の分配人ではないよ。そこのところをしっかり理解してくださいよ」と言っているわけです。

多くの人は、今も昔も、「どのようにすれば、幸福になるのか？」ともし問えば、それは「欲求が叶うことだ」と答えるでしょう。願いが叶う、思い通りになる、理想通りになる、欲しいものが手に入るなども、その一例です。
イエスは、ここでは、欲しいものを手に入れる例えとして、「父の財産」つまり「最大の幸福」を分けて貰いたいと欲求している人の話をしているわけです。

「笑雲先生」
「なんだい、小松茸」
「イエスの教えは、欲を満足させる方向ではなくて、元の欲を消滅、滅却することで、幸せになるということですね」
「そうだね。小松茸。欲しいものを得て幸福になろうとするのではなく、欲しいという自分の強欲が苦しみの元なのだから、それを捨てることによって、不満も元から解消できるわけだ。欲求がなければ不満もないわけだ。その方法だ。そして、不満がなければ人間はもともと完璧に幸せだから、すぐに自動的に幸せになれる。それこそが、揺るぎない真の幸福に向かう方法だ」
「なるほど。では、その、欲しい、欲しいという欲を捨てるには、一体どうすればいいのですか。笑雲先生」
「それは、修行だが、取りあえず、アタマをクリアーにすることから始めなければならない。雑多な思考が増殖していると、取り除きたい元の欲の姿すら見えない」
「そうですね」
「小松茸、アタマの中をスピーディにクリアーにするにはどうするのだったっけ？」

「はい、アタマの中の思考テーブルを素早くクリアーにするには、
（１）元からあるデータ（S）は少ない方が良い。
（２）単位時間でデータが増加するスピード（aX）は遅い方が良い。
（３）単位時間でデータを片付けるスピード（bY）は速い方が良い。
ということですね。これは、瞑想のニュートン算という算式で表されますね」

「おお、良く勉強しているな」
「はい。長年やってますから。そして、瞑想のニュートン算とは、S+aXm-bYm<0　という算式ですね」
「そうだ。付言すると、瞑想での精神力は１５分しかもたないから、m<15だ。その条件で、この式を成立させなければならない」
「そうですね。結構、忙しいですね」
「データを片付ける量（bY）よりも、データを増やす量（aX）が多ければ、いつまでたっても片付かないのだ」
「それはそうです。一方で桶から水をくみ出しているのに、片方でそれ以上の水を注入していては、いつまでも桶の水は空になりませんからね」
「そうだね。マインドは、心配事などがあると、高速でデータを増殖させる。そうすると、アタマはデータで一杯になる。まずは、それらのデータから片付けていかなければならない。そうしないと、底の方にある元の欲を観察することもできないわけだ」
「そうですね。どんどんくみ出して、空にしなければなりませんね。イエスの弟子がそのようなことを質問したのでしょうか、イエスがそのようなことを次で言っていますよ」
「そうかい、では、次のセンテンスに行ってみよう」
「はい」

……

(73)Jesus said, "The harvest is great but the laborers are few. Beseech the Lord, therefore, to send out laborers to the harvest."
(73)Jesus said, "The crop is huge but the workers are few, so beg the harvest boss to dispatch workers to the fields."
(73)イエスが言った、「収穫は多いが、働き人が少ない。だから、主人に願って、収穫のために働き人を送り出すようにしてもらいなさい」

……

なかなかアタマの中の雑多なデータが片付かない弟子が、イエスに聞いたのでしょう。
「イエス様、アタマの中をきれいにすることが大切だとわかりましたが、どうやったら、アタマの中を素早く片付けてクリアーにすることができますか。私は、どんどん考えが走ってしまって、とても片付かないのですけど」
「そうか。どんどん考えが走ると、どんどんデータが増えるから、それでは片付かないね」